

## 音楽教育分科会

### 一人ひとりの思いをうけとめる

石 窪 満

#### 一、基調提案にかえて

##### 1. 子どもたちを取り巻く状況

「子どもは社会を映す鏡」、または「子どもたちが抱えた困難や問題を窓にすることによって社会が見えてくる」といわれているが、今、その窓の先に見える風景は、きわめて深刻だ。4月に実施された全国学力テストの弊害や矛盾がますます明らかになってきている。各地での学校別平均点の公表や、(大阪府での)高校入試の内申点に使うなど、学校全体がますます競争的な教育システムに組みこまれ、学校の序列化で学校も教師も疲弊し、子どもの人権は傷つけられている。

また、戦後教育は、かつて日本を戦争に追いやった国家主義、全体主義的な国民教育への反省にたっで行われてきた。安倍晋三政権はそうした戦後教育の歩みをまったく否定する方向に突き進んでいる。愛国心を盛り込んだ改定教育基本法、それに基づいた教科書検定基準の強化、そして道徳の教科化と道筋をつけている。このことと戦争法である関連法の成立の動きが、まったく一体化して進んでいる。

このような社会の雰囲気子どもたちは敏感に受けとめながら、「競争と管理の教育」のもとで、楽しく豊かに学びあい、生きる力を身につけることが困難になってきている。

音楽分科会では、この厳しい現実の中でも、心くだいて子どもたちと人間的な交わりを大切に、共感し互いに響き合い、創意工夫を重ね、喜びあふれる子どもたちの事実を出し合ってきた。今までの学びを大切に、今年も充実した話し合いをすすめていきたいと思う。

##### 2. 一人一人の思いを受けとめる～そして教材と授業

子どもたち一人ひとり、個性を大切にされながら、自らが伸び伸びと育つ権利をもっている。しかし個人の努力や営みが、画一的な教育計画のもとで、全体としての「顔の見えない」平均点や「おおむね良好」といった大きな渦の中に押し込められている。

ヴァイオリニストでコンサートマスターを務める荒井英治さんが、ある対談で「(学生を教えていて)自分でものを考えるというのが弱いのではないか。オーケストラというのは、一人ひとりが全体のために埋没するんじゃなくて、一人ひとりが自立して自分の感性・自分の気持ちを持って演奏して、それでお互いに聴きあってアンサンブルする。これは自分の意見を持ちつつ、どうしたら意見のすり合わせをするか、社会の縮図だと思っている・・・。」と言っている。

このことは、音楽の授業にもあてはまるのではないだろうか。合唱とか合奏を内容にもつ音楽の授業では、「そろえる」とか「仕上げる」ということを優先して、一人ひとりの表現を押さえ込んだり、また一人ひとりの表情をまったく見落としてしまうという危うさをもっていると思う。自分の存在に自信を持ち、学ぶ喜びが成長する喜びであり、未来の自分をつくっていく、つまり生きる喜びにつながる音楽でいっぱいにする、と考えた時、もっと細やかに一人ひとりの思いに寄りそうということが課題になると思う。

子どもたちと教材の出会いは実にさまざまだ。30人いたら30通りの感受性があり生活の営みがあるからだと思う。いい教材とは何か、なぜこの教材を選んだのか、といった話し合いが毎年深められてきている。今回も教材をどう準備するか、深めるかなどとあわせて子どもの事実から学び合いたいと思う。

音楽の授業は、選び抜かれた教材を媒介にして、子どもたちと教師が心を通じ合わせながら、育ち合っていく場といえる。教材を選択する感性を磨くこと、選んだ教材を音楽として魅力的に表現できるよう精一杯努力して伝えること、教室でうまれた音楽に心寄せ、共有し、共に育ち合っていこうという子どもたちへの信頼など、授業を創造するための大切な課題がある。

これら一つ一つを、全道の子どもたちの事実学びながら、ていねいに話し合っていきたいと思う。

## 二、2015教育研究全国集会の報告

### はじめに～音楽で育つ子どもたち〈教育研究全国集会のレポートから〉

釧路市立城山小学校 山口 政世

8月16日(日)から18日(火)の3日間、仙台市で開催された「教育のつどい～教育研究全国集会2015 in 宮城」に参加した。全国の優れた実践からたくさんの学びと刺激と元気をもらうことができた。

レポーターとしての参加だったので、昨年度の全道合研で選んでいただいた「『歌う』って楽しい!～文化委員会の取り組みから～」を発表した。録音を聴いてもらうと、歌の合間の騒々しさと、歌詞の初めから食いついて楽しそうに歌う歌声に驚かれ、「本当に歌いたくて歌っているのがよくわかる。」という感想を頂き、ありがたかった。

開会集会、教育フォーラム、分科会と、それぞれに学びがあり、感動もあったが、ここでは音楽分科会に絞って報告したい。

音楽分科会では15本のレポートから学び合った。「さすが全国」と思わせるほど、どのレポートからも、迷い、悩みながらも情熱を傾けて実践し、子どもたちと育ちあう教師の姿を感じた。

全部紹介できないのが残念だが、ここでは、特に私の問題意識に強く働きかけたレポートについて紹介する。

#### 1. 生きもの、発見、感動のある毎日

埼玉・馬場さんは小2の実践。プールそうじのときに捕まえたヤゴを一人1匹ずつ世話し、羽化するまで飼う(生活科)。国語で「たんぼぼのちえ」を学習すると、いろいろな種をまき、発芽させる。子どもたちはみんな毎日観察し、どんな小さな変化も見逃さない。子どもたちを夢中にさせる「何か」を、生きものたちは持っている。「主体的にモノとかかわる力」を引き出してくれる。生きものに関わろうとする力、それは人間の本能なのかもしれない。

「そんごくう」「狩人の合唱」などなど、たくさんの歌を歌いながら、お話の歌「オキクルミと悪魔」「スーホの白い馬」「カエルの豆太」に取り組む。ただ歌うだけではなく、アイヌ文様のマタンブシを作ったり、ツルやキツネの踊りを考えたり、休み時間にせりふを言い合って遊んだり、粘土で絵本の世界を表現したりと、お話の世界を丸ごと自分のものにして、どんどんイメージを膨らませていく。歌のリズムと言葉がどんどんはっきりしていく。

京都・近藤さんは元気すぎる小3の実践。4月、あふれるエネルギーを歌に向けて、元気いっぱいに歌う。6月になると、徐々に新鮮さが失われるのか、集中が続かない子どもが出てくる。「ここが正念場だ」と、近藤さんがとった方法は、音楽室のイスと机を片付けて広場を作り、いきなり「荒熊親分(オキクルミと悪魔)」の一人芝居。子どもたちはすっかりお話の世界に引き込まれ、歌もセリフもどんどん覚えていく。裏山から拾ってきた枝で弓矢を作り、厚紙に模様を描いてマキリを作る。アイヌの人々の暮らしを学び、お話の主人公になりきって、その世界のイメージをどんどん膨らませて遊ぶ。子どもたちの充実した内面が、見事に歌に表れる。

これらの実践から、子どもたちの生活を、驚きと発見と感動のある毎日にしていきたいし、工夫次第でできるんだ、と希望を持つことができた。「教科書を終わらす」「やらなければいけないことをこなす」ことに振り回されず、本当にやりたいこと、子どもたちの力になることを、工夫しながら無理せずやっていきたい。

## 2. 特別支援学級・学校の子どもたち

特別支援学級・学校の実践はどれも本当に素晴らしいものだった。

東京・富澤さんは、「学び方スタンダード」に特支の子もあてはめようとする学校環境の中で、「自分で感じ、自分で動く」子どもを育てようと取り組んだ。

新しくチームを組んだ先生と指導観や教材に共感しあえる関係を作りながら、リズムや歌を楽しんでいく。リズムの DVD には、音楽を聴いて、音楽に合わせてスタートする子どもたちの姿が映っていた。一人一人が自分の意思でスタートする、その時の表情、スキップの動き、終わった時の達成感を画面から感じることができた。

沖縄のリズムやハーリー、「あんばんぬゆんた」を満喫した子どもたちが作った粘土のカニも素晴らしかった。どのカニも力強く、生き生きとしている。お話や歌が大好きになり、愛着を強く持つと、細部までよく観察し、自分の中に生まれた「カニ」を、そのまま表現しようと丁寧に作業をする。そんな中から生まれたカニたちだった。

兵庫・細田さん（知的障害児学級）の2年生 M さんの歌声はとても感動的だった。「気に入ったところをかつこよく歌いたい」という気持ちがあふれていた。

発達年齢3歳くらい、言葉も幼児語が残り、明瞭な発音は難しい M さん。

教科書の学習（国語・たんぼぼ）を M さんの実態に合わせて組み換える。「絵本を読んで、お散歩に行つて、歌つて、ちょっとだけノートに書く」。この学習が楽しくて、くり返し、くり返し要求する。「やりたい」ことが「できた」という満足感が、さらに学びへ向かう原動力となっていく。

その後も子どもたちの「今やりたいこと」「楽しい」に適切に働きかけ、学習を組み立てていく細田さん。決して強引に引っ張ったり、押し付けたりせず、子どもたちのありのままの姿を受け止め、働きかけていく姿勢に深く共感し、見習いたいと思った。

京都・特別支援学校高等部の子どもたちは発達年齢7歳から10歳までの18名。障害の多様性、複雑化、家庭環境の困難さなどにより、彼らに対する正しい障害理解は家庭の中でも難しく、意志の伝達や相互理解にも困難さがあった。そんな子どもたちが社会に出て働き、豊かに生きていくための力をつけたい、という願いで進められた実践だ。

彼らが歌った「なまえ」は聴いている人たちの心に訴えているようだった。「ぼくは、今、ここに生きている」と。分科会の会場が感動であふれていた。

この歌声は、彼らが毎日向き合っている厳しい現実と、それをのりこえるための学びや音楽から生まれたものだ。「子どもの権利条約」や障害理解について学習し、学んだことを演劇や歌で表現することで、さらに自分と向き合い、学んだことを消化していく、そんな毎日の積み重ねから生まれたものだ。

学習発表会の創作劇「まっすぐ生きる」は、第1場「子どもの権利条約について学ぶ授業風景」、第2場「差別、虐待、いじめについて」、第3場「3年生の決意発表」という構成。「なまえ」の歌詞の内容（自由を希求する）と相まって、これまで自分の心の奥底に閉じ込めておいた、または表現することができなかった想いを、内面から出る叫びのように歌っていた。

うまく言い表せないが、今、この時、彼らに必要な歌だったのだと思った。

## 3. 伴奏の大切さ

音楽分科会では、折に触れてレポーターや司会者、共同研究者たちの伴奏で歌い合った。歌い慣れている曲でも、伴奏者が変わると音楽が変わる。そんな新鮮さを感じながら歌うことができてうれしかった。どの伴奏も、やさしさがあふれているように感じた。

「あまがえるの歌」では、前奏から「風」を感じ、目が覚める思いだった。今まで何度も歌ってきたが、こんな風を感じたことは初めてだった。

シューベルトの「詩人ミューズのお気に入り」も歌う機会の多い曲だが、どちらかといえば苦手な歌だ。だが、右手でメロディーを引いてもらえることでとても歌いやすく、リズムやテンポにのって歌えたと思う。

そして、伴奏者の笑顔を見ながら歌うことの心地よさ。いつも楽譜を用意するのに手間取ったり、楽譜にかじりついて弾いたりしている自分を深く反省し、できるだけ子どもたちの顔・表情を見て伴奏しようと決意した。と同時に、何をイメージして弾くのか、この音楽で伝えたいのは何なのかを問い直し、一つの音もおろそかにすることなく、自分の思いを込めて弾こう、と思った。

「教材を選ぶ」。目の前にいる子どもたちと、今、何を歌うのか。子どもたちの興味や関心、悩みや葛藤に寄り添い、一歩前へ進む力となる歌は何か。音楽の楽しさ、素晴らしさを存分に味わえる歌は何か。

全国の実践を学び、それを見極める力もつけていきたいと思った。でも、まずは、自分が肩ひじ張らずに、音楽で自由に表現すること、楽しむこと、遊ぶことを大切にしていきたい。

### 三、実践報告～レポート発表

今回は、小学校の実践と中学校の実践2本のレポート提案があった。

レポート1 特別支援学級の取り組み 山口 政世 (釧路市立城山小学校)

レポート2 文化を創造する教室をめざして～日常の実践メモから～

石窪 満 (標茶町公立中学校音楽講師)

今回は、事前のレポートおよび参加者の報告がなく、運営側で相談して、一応、司会者と共同研究者からも提案レポートを用意し、当日に期待したが残念ながら、参加者からのレポートはなかった。結果として2本のレポートのみで分科会を進めることになった。

分科会の参加者は、現職の教員は司会者と共同研究者のみで、多くは教育大学の学生がほとんどであった。それぞれの二本のレポート報告に対して、質問、感想そして十分な討論のための時間が保障され、また討論内容もそれぞれに対して共感的に受け入れられた。また学生からはさまざまな質問が出され、素直な感想を聞くことができ、話し合いも深められたと思う。

ここでは、それぞれのレポート提案の特徴的な内容を、提案者の原文を尊重し、引用も含めて報告したいと思う。

#### 1. 特別支援学級の取り組み

山口 政世 (釧路市立城山小学校)

山口政世さんは、昨年の全国教育研究集会“教育のつどい”に北海道の代表としてレポート提案をしてきた。その時の報告として丁寧なレポートを用意してくれたが(前述)、その報告と関連させて、今年持っている特別支援学級の取り組みを、録音された子どもたちの様子とあわせて口頭による実践報告をしてくれた。

釧路市内にある城山小学校は全校児童数180名、全学年とも1学級の市内では小規模校の学校だ。報告は初めて特別支援学級の担任になって、音楽の授業は持っていないが、1週間に一度しかない朝

学習のわずかな時間の出会いを大切にし、音楽の素敵さを伝えようとする地道な取り組みの報告だった。その提案された発言内容を報告しよう。

今年、初めて特別支援学級の担任となった。一応、知的学級の担任で、担当は5年生の男子2名。4月から、朝学習の時間（10分間）の毎週木曜日を「音楽」ということで、私の担当の時間にしてもらっている。メンバーは、「知的」「情緒」の2学級8名の子どもたちと担任・指導員5名。子どもたちは3年生4名、4年生1名、5年生2名、6年生1名。うち、女子は2名。知的在籍の子は2名だが、2人とも情緒の特徴が強い。

4月、初めて歌ったのは「つくしがでたよ」。この歌を通して、子どもたちの世界へ道端の「つくし」を運ぶことができた。

そのあと、「たんぼぼひらいた」「そんごくう」「世界の子供よ」「チポリーノの冒険」を歌った。季節感や子どもたちの興味・関心のあるものを選んだ。「世界の子供もよ」は、全校のうたごえ朝会で歌うことにしたので、こちらでも歌った。

2学期に入ってからは、「三人の小人のしごとのうた」、その後は学芸会全校合唱の練習となってしまった。

「三人の小人のしごとのうた」は、生きものがたくさん出てくる楽しい歌。5年生がメダカ、3年生が青虫、4年生はザリガニを飼う中で、子どもたちがどんどん生きものに興味を持っていく中で歌った。子どもたちは楽しんで歌ってくれた。

次に、「秋の空」を歌った。歌う楽しさ、声を出す気持ちよさをもっと感じてほしいという思いからこの歌を選んだ。

いつもは「歌おう！」と声かけしてばかりなので、この時は「歌わないで聞いてね！」と始めてみた。前半の歌の部分は私の歌を聞いてもらい、「お～い！」は全員で。1回目は声が近くに落ちる感じだったので、「今日の青空に届くように」2回目。声が伸びていった。調子が出てきたところで歌の部分を手伝ってくれる人を募集すると、3名が応じてくれた。だんだん楽しくなって、声が出てきて、こだまも返ってきた。みんなで交代で歌っているうちに、歌もすっかり覚えることができた。

最近、「機関車のうた」を渡した。鉄道大好きの子のために選んだのだが、違う子2名がとってもちが入って、毎回リクエストしてくる。歌う様子を見ていると、この曲のもつリズムというか、躍動感がたまらないようだ。次も、リズムカルな曲にしようと考えている。

子どもたちと音楽をする時間をつくったが、それがどのように子どもたちに届いているかは自信を持ってない。子どもたちとつくしとの出会い、そして目に見えない内面での広がりみたいなものは少しあるのではないかと期待はしているが、はっきりとはわからない。また、情緒的に安定してきていると感じる子も数名いるが、それが「音楽」の成果なのかどうかはわからない。日々のいろいろな体験や学び、教師たちのはたらきかけと音楽との相乗効果なのではないかと思う。ただ、目の前にいる子どもたちに役に立つがどうかではなく、「この歌、大好き」「もう一回歌いたい！」というような音楽との出会いをもっともっと大切にしたいと思っている。

山口提案に関連して提出された実践曲～「秋の空」 （渡辺茂 曲 まど・みちお 詩）

「三人の小人のしごとのうた」 （丸山亜季曲 中村欽一詩）

## 2. 文化を創造する教室をめざして～日常の実践メモから～

石窪 満（標茶町公立中学校音楽講師）

釧路管内標茶町で技芸講師として、小規模校に週1時間の合同音楽の授業に入っている。わずか5

人だが、「中学校で、音楽をするのが楽しみ・・・！」という新一年生の期待にあふれる眼差しに出会ったり、喜びや悲しみ、悩みや不安をかかえながらも、どの子どもそれぞれにユニークな存在と考えた時、限られたたった1時間の授業でも音楽の喜びに満たされなければと思いを寄せ、レポートの柱にしている。

小規模校で異学年による「合同授業」の難しさに教材をどうするかという悩みがある。そのことについてどう考えているか、レポートで触れている部分がある。

### 教材を選ぶ難しさ、楽しさ

1年生から3年生までの「合同授業」の教材をどうするか、という難しさがある。はじめて講師として赴任してきた頃は、一応、1年生の教科書のカリキュラムで、次の年は2年生の・・・、と決めていて、特に共通教材に関しては、変則的でどの学年も同じ教科書で授業を進めていた。しかし、やっぱり4月には3年生に滝廉太郎の「花」をやりたいし、ある時期がきたら「赤とんぼ」を歌いたくなるし・・・。結局、この形は崩れていき、独自の教材配列を組むことになっていった。

そもそも、たとえば、日本語の抑揚やリズムと旋律のとのかかわりを感じとるためにと目標を掲げて「夏の思い出」を取り上げたり、歌詞と旋律のかかわりを理解するために「早春賦」を。歌詞が表す情景を想像し、声部や伴奏を理解して「花」を表現する、などなど、何かを教え込むために、本来持っているその作品のよさが後退させられている。作品がその犠牲になりといえば、きついかもしいが、作品の価値を貶めている教科書に、音楽のすばらしさを本気になって伝えようと考えた時、どれほどの価値があるのだろう。作品にヘンな看板を背負わすことなく、素直にそのすばらしさを伝えればいいものを。もし意図があったとしても、後から付いてくるものだ。

しかし、そうなる教材を選ぶという作業は、また大変なことだ。異学年（異学年でなくても）の子どもたちを前にして、今この教材と一緒にやりたい、この教材ならきっと子どもたちの心をとらえるだろう、と思い巡らしながら教材を選ぶ。「昔からこれでやっています！」というわけにはいかない。目の前の子どもたちはいつも変わり、集団としての雰囲気も違うし、その時々空気感も違うのだから。教室に集まってきた子どもたちが、教材を真ん中にして、発見があったり、同調したり、反発しながら音楽が深まり、教師も一緒になってその音楽を共有する。そんな教材を準備することは難しいことだが、楽しい作業でもあると思う。

そして、もちろん同じ曲を取りあげることも数多くあるが、そんな時ほど教師は新鮮にその作品と真向かわなければならぬと痛感している。作品に対して、教師の新鮮な出会いがないと、そのうわべだけが、形だけが子どもに伝わってしまいそうだからだ。子どもたちも覚えた、歌えるようになったというところで止まってしまう。だから、2、3年生と共通に歌える歌を早く1年生に覚えてもらいたいと思ってしまうと、その危うさが顔を出す。2、3年生にも、もう一度新しい歌を渡す気持ちで取り組むことが大切なのだ。ということに気づいたのもごく最近のことだ。

次に、学校祭にかかわっての取り組みが紹介された。しかし、学校祭に向けて特別新しいことをするのではなく、日常の授業の延長線上に発表があると考えているという。3年生のHくんが、「3年間の思いもあるので、シューベルトを歌いたい」と言い、みんなも「そうしよう！」と賛成し、シューベルトの歌曲を歌うことにしたという。5曲の歌曲を歌うことにし、教師がそれらを紹介するようにして台本を書き、リコーダーと歌によるステージを創ったことがレポートされている。レポートには、その台本と子どもたちの活動の様子、歌曲が紹介されている。

しかし、レポートの中心はそこではなく、思わぬ事態がおき、ピアノによる伴奏ではなく、CDを使って歌わなければならなくなり、その時の子どもたちの声を中心に、CDカラオケの持っている矛盾をあぶり出している。少し長いですが、その後半を紹介し報告とする。

## 思わぬ展開へ！

9月も最後の週にはいり、文化祭当日（10月4日）の1週間前となった。授業の日が総練習の日と重なったので、その2日前に授業を入れてもらった。その時にはじめて気がついたのだが、1年生のSくんが「詩人、ミューズのお気に入り」の歌詞が思うように歌えなく、不安がっていた。みんなの中では一緒に歌えていたのだが、二人で歌うとなると気持ちが引っ込んでしまったのだろう。時間もなくなり困ってしまった。こんな時、時間講師は融通が利かなく、不便（ふびん）でならなかった。休み時間や放課後などの時間がないのだ。最後の手段として、こんなことは初めてだったが、サークルの大人たちが歌っているCDがあったので（「歓喜」だけはなかった！）、それを急ぎよコピーして子どもたちに渡すことにした。それを家に帰ってからも聴いてもらい、少しでも慣れてもらおうという魂胆だ。よほど切羽詰まっていたのだ。放課後、作成したCDを学校に持っていき、子どもたちは劇の練習をしていたので、担任の先生に子どもたちに渡してもらうようお願いをした。その時、伝言をお願いした。「CDの大人の歌より、みんなのシューベルトの方が、ずっと好きだからね！」と。

ところが、これが思わぬ方向へ展開した。その次の日、私は体調を崩してしまい、入院することになってしまった。しかも2週間以上（その時は、そう言われた）もだ。学校と連絡を取ってもらい、ことの顛末を話し、とりあえず総練習を何とかしてもらうことにした。本番には病院の許可をもらってでも行くつもりでいた。総練習を終えたその翌々日、少し落ち着いてきたので、病院から担当の先生に電話で様子を聞いてみた。そうすると、私が用意したCDをカラオケのようにして歌ったというのだ。音響担当の先生が、ヴォリューム調節で前奏や間奏のところの音を大きくして、歌が入ると小さくするというふうにしてみたというのだ。当日は、医師とも相談して行けるようにしたいと申し出ると、「そうやって本番も何とかするので、それより終わったあとの授業の方を子どもたちは楽しみにしているので、ゆっくり休んで治して下さい。」と言われてしまう。その言葉に安心したのか、体の力がすっと抜けていった。

## のびのびと自由に表現できなかった

文化祭が終わって2週間ほど経ってから、退院後はじめての授業があった。その時みんなと一緒に音楽発表のビデオを見ることができた。

みんな堂々と自信を持って発表している姿があった。一曲一曲歌うたびに拍手を送り、目頭を熱くしてしまった。声が小さく会場の人々に聞こえるだろうか不安がっていたNくんの声もしっかり響いて、内気なシューベルトの雰囲気を出していたし、そのお兄さん役をしたSくんも若者らしい「詩人、ミューズのお気に入り」を歌い上げた。二人の姉妹役をしたRさんとYさんが歌った「歓喜」はCDがなくて、無伴奏で歌ったが、その清潔なまっすぐな歌ごえに感動してしまった。そして、一人で歌わなければならないフォーゲル役のHくんは、「水の上でうたう」を青年としての息づかいを感じさせるほどの表現に聴き入ってしまった。

その後、感想を聞かせてもらったが、口をそろえるように緊張の中でも頑張ったことを私に伝えてくれた。そして家に帰ってからも練習をしたことを聞かせてくれた。またCDに合わせて歌ったことに関わって、3年生のHくんは「自由に歌えなかった・・・」というようなことに触れてくれた。ある意味で、こんな経験はそうないことなので、文化祭が終わってからずいぶん日も経っていたが、遅まきながら感想文を書いてもらうことにした。

リコーダーがはやくなりすぎてしまいました。「詩人、ミューズのお気に入り」をいっぱい家で練

習してきました。(1時間)ぐらい。CDがあって本当によかったと思いました。CDにあわせるのは大変でしたけど、みんなで協力してやれてよかったと思いました。またこれからもいしくぼ先生といっぱい歌などをうたいたいです。(1年 Sくん)

中学生の発表では、一人ひとりが練習してきたせいか十分にできたんじゃないかなーと思います。CDの音をよく聴きながらやり、とても難しかったのですが、とても楽しんで発表することができ一つの思い出になりました。またRちゃんと二人で「歓喜」をアカペラで歌いました。とても不安でしたが、最後まで二人で歌うことができました。さらに、Hくん以外の4人で「詩人、ミューズのお気に入り」を歌うことになり、リズムを取るのがとても難しく本当に歌えるのか心配でしたが、家で練習をがんばってやり、4人の歌ごえが一つになったと思います。今回は、みんなが全力でがんばり、発表が成功したことがとてもうれしかったです。来年も発表がよくなるようにがんばりたいと思います。(1年 Yさん)

本番では、思っていたよりも緊張しませんでした。リコーダーでは、一番いい音を出すところで、失敗してしまい、反省しています。歌では、高い所の声が出なかつたりしましたが、歌うことができました。セリフは、声がきこえたといわれたので、よかったと思います。本番前日くらいから、リコーダーを組み立てておくような準備をしておけばよかったと、本番直前に思いました。自分的には、うまくいったのでよかったです。(2年 Nくん)

文化祭の発表は、Hくんが言っていた「自由さが無い。」という言葉聞いて、思い返してみるとその通りだと感じました。また、ビデオを見ると自分の声は聞こえていないのではと不安になりましたが、本当は響いていると聞いて安心しました。反省点はたくさんありますが、発表中はお客さんをほとんど意識せず緊張しすぎず、特に「詩人、ミューズのお気に入り」を楽しく歌うことができました。今年の文化祭は家でも去年より練習した分、自信を持って歌えたことと、なにより発表を楽しむことができたので良かったと思います。(2年 Rさん)

今回の文化祭での学校音楽では、石くぼ先生がいない条件でのぞみました。幸いにもCDがあったのでそのCDに合わせて練習したんですが、それがとても難しく、自分の100パーセントの力が出ない事がありました。今までは歌う側と弾く側で息を合わせながらやっていたのですが、何回やっても変化のないCDとやりました。家でも練習をたくさんして本番にのぞみました。自分では、楽しく歌えたと思うんですが、のびのびと自由に、アレンジをきかせた事もできず少し物足りなさもありました。自分たちを成長させていただいた石くぼ先生に感謝しています。(3年 Hくん)

この“非常事態”にかえて、子どもたちは発奮し自発性を発揮したのではないだろうか。いってみれば、なかなか歌詞の入れ方が難しかった1年生のSくんのために苦肉の策として作ったCDが、思わぬ打開策として役に立った。既成の“CDカラオケ”を使っただけの授業を肯定しない私にとっては、複雑な気持ちもあるが、子どもたちの自発性を鮮明に出しながら、なんとか一つのステージを作り上げようと一人ひとりが努力し、みんなで気持ちを合わせて歌おうとする営みは、子どもたちにとっても貴重な取り組みだったに違いない。そして、それを(まさに機転を利かして)見事に支えてくれた先生方に感謝したい。

また、Hくんが言っているように、「何回やっても変化のないCDとやる」ことの矛盾をきちんととらえ、「(歌を)歌う側と(ピアノを)弾く側で息を合わせてやっていた」ことの大切さを感じていることに感心した。これは私自身が音楽をする時に最も大切にしてきたことの一つなので、きっと、今までやってきた授業を通して、そう感じてくれたのかなと思うと、すごく嬉しかった。



石窪提案に関連して提出された実践曲～

- 「ます」 (リコーダー3重奏) (シューベルト曲 石窪編曲)
- 「たび」 (シューベルト曲 林光訳詞)
- 「詩人ミューズのお気に入り」 (同)
- 「歓喜」 (シューベルト曲 今川須美江訳に若干の補筆)
- 「水の上でうたう」 (シューベルト曲 林光訳詞)
- 「ます」 (同)

### 3. 参加者からの実践報告

レポートの発表と討論の後、参加者からの実践報告ということで、参加者二人(札幌市、旭川市)から、今の教室や子どもたちについて、授業が成立しないなどの深刻な報告もあった。

また、それぞれの地域の教育研究活動の実態について交流することができた。教研の中では音楽の分科会が成立しなく困難な状況にあることが報告され、実態が明らかになった。

## 四、今年度の特徴と来年度への課題

今年度の分科会の特徴としては、大きく次の五点が挙げられる。

①今回は2本のレポートが揃い、小学校及び中学校の取りくみ、そして小規模校の実践と、特別支援学級の実践を交流することができた。特に、特別支援における実践は音楽分科会では少なく、貴重なものだった。レポートを中心に日々の実践を話し合い、音楽教育を通して子どもたちの何を育てていくのか、じっくり話し合うことができた。

②レポートの内容としては、先にも触れたが特別支援における取りくみ、そして日常の授業の子どもたちの変化を記録した実践というふうに、学校行事(全校朝会、学校祭)との関わりもあるが、日々の実践の積み重ねが重要であることが再認識された。

③レポート発表においては、プリントによる提案に加え、実際の子どもの声、音楽を記録したCDによる発表があり、より具体的に話し合いを深めることができた。

④ここ数年、参加者がきわめて少ないが、運営委員の高校の先生も含め、小中高の実践を交流することができ、幅広い意見を聞くことができた。また、今年も教職を目指す学生10数名の参加があり、具体的な質問や新鮮味のある感想をそれぞれが述べてくれた。それに対し、一般の参加者、先生方の参加が少なかったといえる。

⑤分科会の後半に、各地域、各組織による教研活動の様子を交流することができた。(上川、釧路、札幌市)その交流から学び合うことや課題が見えてきた。

今後の課題としては、やはりレポート提出の確保とより多くの参加を呼びかけることだろう。昨年も同様に提起したが、各地域からのレポート提出を確保するためにも、事前の取り組みをもっと意図的にしなければならぬと思われる。今回の交流でも明らかになったが、やはり各地域の教研活動を活発にするための取りくみも不可欠と思われる。

レポートの内容としては、もちろん学校行事等も含め、多様なレポートを期待しているが、日常の授業記録をもとにした実践レポートも期待したい。また今年も文字による発表とあわせて録音等の記録した子どもたちの授業の音楽を聴いてもらう提案があったが、具体的なイメージをつかむためにもこれからもこのような提案が期待される。

発表の方法として、今年も分科会参加者が一日目と二日目ではほとんどが入れ替わったこともあり、一日目に発表したレポートを二日目も発表するという事態が起きた。レポート数が少ないからできる

ことであり、ていねいな進め方ともいえるが課題も残した。

会場についてだが、昨年に続いて音楽の分科会会場にピアノがなかった。これは一昨年前までの会場と同じようにピアノがほしい。今まで、ほとんどのレポートには実践した楽譜を添付しているので、教材を実際に歌いかわしたり、音にしながら討論を深めるためにも必要と考えている。また再生機材も常設しておくことが望まれる。